ドリームダイバー

山猫軒従業員・黒猫

枕元に玩具の船を置き、走らせる。

依頼人はそんな私の様子を胡散臭そうに見つめる。

船が布団の中ほど、沖と呼ばれる場所に着くまでの間に私は機械と道具のチェックを済ませておく。

沖に着くと私は潜夢服を身に纏い、布団の中に飛び込む。

ばふんっ…

私の体は布団の中に消えた。

布団の中は夢の世界。夢に溺れないよう、注意しつつゆっくりと夢底に向かっていく。

布団の中は昼間でも暗い。布団は寝具であり、人に暗闇と安らぎを与える場所だ。ここで気を抜こうものなら私も微睡と安らぎに捕らわれ、帰らぬ人となるだろう。細心の注意を払い、周囲を探る。

見つけた。大きな沈没船だ。

私は沈没船に近づき、倒壊の恐れがない事を確認すると中へ入る。

中はがらんとしている。もう何も残っていないように見えるが、ここから宝を見つけ出すのが私の仕事だ。

隅々まで探し、ようやく見つけた小さな箱。

出来ればもう少し探してやりたいが現素残量が少なくなってきた。一度船に戻った方がいいだろう。

沈没船の外に出る。

途端、まるで砂の城が崩れるように沈没船が泡となって消えた。

あの大きな船に積まれた宝がこれ一つだけだとは…

苦笑いを浮かべ、私は布団へと浮上していく。

布団の中から顔だけ出すと依頼人が腰を抜かしていた。

それもそのはず。傍から見れば今、布団の上に私の首だけが出ている状態だ。

布団の上に潜夢ヘルメットが置かれているようにも見えるだろう。

布団の縁に手をかけ、部屋へと上がる。
そして手に持った小さな箱を依頼人へと差し出した。
依頼人は恐る恐る箱を受け取ると、そっと開いた。
『僕も大きくなったら、父さんみたいな立派な先生になるんだ！』
箱の中には小さな子供の、大きな憧れが詰まっていた。
依頼人はそれを見て一滴の涙をこぼす。
堰を切ったかのようにぽろぽろと大粒の涙をこぼし始める。
「それを捨てれば、貴方の教師になるという夢は消えてなくなります。どうしますか？」
ヘルメットを脱いだ私は問いかける。
箱の中身は夢の残滓。未練と呼ばれるもの。
教師を夢見たものの、理想と現実のギャップに苦しみ、長時間労働やパワハラで心の病気を患った依頼人。
『僕は…どうしたらいいんでしょうか？』
数時間前、依頼人は憔悴しきった顔で私に問いかけた。
『その答えを、今から引き上げてきます。どうするかは、貴方が決めてください』
心の奥底にあった気持ちを突き付けられ、涙する依頼人は袖で乱暴に涙を拭うと顔を上げた。
真っ赤な目で、しっかりと私を見つめた。
「ありがとうございます。僕は、もう少し…もう少しだけ頑張ってみます」
瞳に生気が宿る。箱の中身が、依頼人の胸の中へと吸い込まれる。
私は布団の中ほどに置かれた玩具の船を依頼人へと渡した。
「夢へと向かう貴方の航路が順風満帆でありますように。ボンボヤージュ」
依頼人の夢へと向かう輝きが失われないよう、私からも祝福の言葉を贈った。

仕事を終わらせた私は海辺の喫茶店へと入った。
静かな店内、マスターが海を見ながら珈琲を飲んでいる。
「お疲れ様です。所長」
私の言葉に苦い顔をするマスター。珈琲を苦くし過ぎたのだろうか？
「所長はやめてくれ。僕はもう引退した身。今は君が所長だよ」

「では、会長とお呼びしましょうか？」
マスターはやれやれと言った感じで私にも珈琲を差し出した。
いい香りとは裏腹に、一口含めばその苦さに眉をしかめてしまう。
「それが現実の味だよ。香りとは理想。苦みとは現実。珈琲はこの世を圧縮した飲み物だ」
マスターの言葉を聞き流し、珈琲を飲み干す。今まで夢に潜っていたんだ。目を覚ますにもこの苦さが丁度いい。
「それで、僕から引き継いだドリームダイバーの仕事はどうだい？」
「おかげさまで。夢と現実の狭間で苦しむ人達を今日も助けてきました」
「それはそれは」
いつものように他愛ない話を始める。
何気ないこの時間が私は大好きだ。
「今の君を見ていると、この仕事を紹介して本当に良かったと思っている」
「私も、この仕事に就けて本当に良かったと思っています。私を拾ってくれた所長には本当に感謝していますよ」
何の取り柄もなく、将来に何の夢も持たない若者。それが私だった。
そんな私を社会は受け入れてはくれなかった。就職活動を行う度に不採用通知の山が築かれる。希望のない未来に、自殺を考えた事もあった。
夢を持っている人が、情熱を持つ人が、やりたい事がある人が、羨ましかった。
『君、いい目をしているね』
喫茶店で一人、珈琲を飲みながら窓の外を眺めていた私の対面に初老の男性が座っていた。
『君は彼らが羨ましいかい？』
「はい…私にはないものを…夢を持っている人達がとても眩しいです」
染みついた面接の癖か、私は男性を不審に思う事なく質問に答えていた。
『夢…ね。そんなもの、人が生きていく上で足枷にしかならない。君も子供の頃なりたかったものはあるだろう？それになれないと知った時どう思った？少なからず絶望しただろう？なら、夢なんてない方がいいと思わないか？』
「私はそうは思いません。夢は生きる活力です。昔から夢を持たず生きてきた私にとって、夢のある人達は本当に凄い存在なんです」

空気が、男性の表情が変わった。

『夢がない？昔から？本当かね？』

「はい。平凡な家庭に生まれ、それほど不自由もなく育った私には、将来の夢はありませんでした。ただ漠然と毎日を生きて来ただけです」

男性は私に1枚の名刺を差し出した。

「僕は榊。ドリームダイバーという仕事をしている。カウンセラーのような仕事だが、興味があるのなら一緒に働いてみないか？」

思いもよらぬところで採用の切符を手に入れた私の人生は、今日を境に大きく変わる事となった。

ドリームダイバーとは夢の海へと繋がる布団に潜り、夢の回収を行うプロで、潜水士と夢鑑定士の資格を必要とする特殊職業であるらしい。

夢の海とは寝ている間に見る夢の事。故にそれは布団から繋がっている。

回収対象の夢とは憧れや理想の事。誰しもが胸に抱いているそれは前者の夢と繋がっている。

故にドリームダイバーは前者の夢に潜り、後者の夢を回収する仕事である、と教えられた。

聞いた事のない仕事内容に私が眉をひそめていると「百聞は一見に如かず。まずは僕に同行してもらう」と言うので、ドリームダイバーがどのような仕事か同行した。

初めて夢に入った感覚は今でも覚えている。

夢は水のように私を包み込む。川のように私を流そうとする。海のように私を引きずり込もうとする。

私は初めて、夢が恐ろしいものだと知った。

パニックに陥り、手足をばたつかせては上下左右も分からない空間で暴れたものだ。

榊はそんな私の腕を掴み、手を握ると落ち着かせてくれる。

分厚いグローブ越しで伝わってくる鼓動に私の呼吸も徐々に落ち着いてきた。

あまりにも情けない姿に初日でクビになるかと思いきや「ドリームダイバーは夢を恐れなければならない」と言われ「やはり君は素質があるよ」と褒められ

た。

夢とは本人だけでなく、周りも飲み込む津波のような存在だ。絶対に侮ってはいけない。それは今でも私が仕事をする上で一番大切にしている事だ。一瞬の油断が命取りとなる。

船を見つけ、中を探索する。

夢の詰まった箱を手に依頼人の元へと戻る。

まるでトレジャーハンターだ、なんて思った。

ただ、依頼人は受け取った宝を前に嬉しそうにしていない。

「僕の中に、まだこんなにも夢の残滓が残っていたんですね。未練たらたらで、女々しいったらありゃしない…」

自らを卑下するように苦笑いを浮かべる依頼人に対し、私の口は自然と動いていた。

「私は貴方の夢を見て、羨ましいと思いました。私には夢中になれるものがなかった。貴方のように輝く事が出来なかった。人を惹き付ける夢を持つ貴方に、もっと早くに出会いたかった」

私の言葉に目を丸くした依頼人は顔を歪めて「ありがとう」と呟き涙した。

もしかして、私の言葉は依頼人を追い詰めてしまったのだろうか？涙を流し続ける依頼人を前にあたふたする。

「満点の答えだ」

榊は私の肩を叩き、嬉しそうに微笑んだ。

「下手に夢を持っている奴は人の夢をバカにする。“出来っこない”と決めつけ、鼻で笑う」

帰りの車の中。突然、榊が真剣な表情で話し出した。

「夢がなくて何が悪い。美しい夢を偏見なしに見つめる事が出来るのは夢を持たない、夢の美しさに憧れる者だけだ」

榊の言葉は他人に吐き捨てるかのようで、自分に突き付けるかのようで、私に問いかけているようにも聞こえた。

「改めて君にお願いしよう。ウチで働かないか？」

私の家の前で車を停めた榊は私の目をじっと見つめた。

迷いは一瞬だった。

「ちょっと待っていてもらえますか？履歴書、持って来ます」

私の答えに榊は「勿論だよ」と笑ってくれた。

初めての仕事は怖かった。人の夢の中に入り、自分がどれだけ異質な存在かを思い知らされた。

でも、それと同じくらい人の夢の輝きをもっと見たいと思ってしまった。

人の夢とは夜空に輝く星と同じだ。誰しもが一度は手を伸ばす。自分の夢を叶える為。他人の夢を叶える為。

ドリームダイバーは夢を掴む存在ではない。夢という星の輝きを尊ぶ存在だ。

夢を尊ぶ事の出来る者だけがドリームダイバーを名乗る事が出来る。

私はこの仕事が好きだ。誰よりも美しいものを見る事が出来、誰かの夢に至る道への手伝いが出来る。

夢が叶えば共に笑い、叶わなければ共に涙する。夢を持たない私が、夢に寄り添える存在でいられる。

私は時折、潜夢服を身に纏い私の布団に潜る。夢底には相変わらず何もない。我ながら殺風景この上ない。

そんな何もない場所に降り、私は上を見上げる。

そこにはこれまで出会った依頼人の夢が星空のように広がっている。

泡沫の夢。

儚くも消えゆくそれを私は美しいと思う。

手を伸ばし、星のように煌く夢を見つめる。

夢を持たなくとも、人は幸せを胸に働ける。私はドリームダイバーを通じて、そう考えている。